生涯学習情報誌
Life Learning

3
2022
Mar.
NO.379

生涯学習開発財団

第17回 銀粘土でつくる シルバーアクセサリーコンテスト国際展

財団後援事業

表彰式はコロナ対策のため入賞者、審査員、プレゼンターのみ出席とし、間隔を十分に確保して行われた。

東京芸術劇場の入選作品展示会場

財団が後援し、アートクレイ倶楽部（相田化学工業主宰）が隔年開催する「シルバーアクセサリーコンテスト国際展２０２１」が、12月21日から26日まで、東京・池袋の東京芸術劇場ギャラリーにて開催された。

24日には、十分なコロナ対策のもと表彰式がとりおこなわれ、橋本聖子名誉会長が「東京２０２０のメダルは、国民の皆さんの不使用の携帯電話など都市鉱山から集めて作られた。相田会長はずっと前からそれに取り組み、資源の再生と文化の振興を同時にされている」と事業の意義を讃えた。

グランプリ受賞は川島和代さん。「コロナ禍で時間はあるが浮かない日々。ひらめかない中で手を動かしていたが、最後に熱い思いが高まって走り抜けた。銀粘土やみなさんとの出会いに感謝したい」。生涯学習開発財団奨励賞の狩野良行さん。「挑戦したかった四神で受賞できうれしい。師匠の助言で自立させられた」と受賞の声。

審査委員長でジュエリーデザイナーの三木稔氏は、「グランプリ作品は身につけても写真に撮られても美しい。見たこともない作品で感動させてほしい」と述べた。

最後に相田征一会長から次回２０２３年のテーマ「物語」が発表され、「グランプリを２度受賞した人はまだいないので、ぜひ挑戦してほしい」と鼓舞した。

橋本聖子名誉会長（左）と相田征一会長（右）から栄誉を讃えられた、グランプリ受賞の川島和代さん。

〈グランプリ〉文部科学大臣賞

川島和代氏（栃木県）
自由課題　アクセサリー部門「編むカタチ」

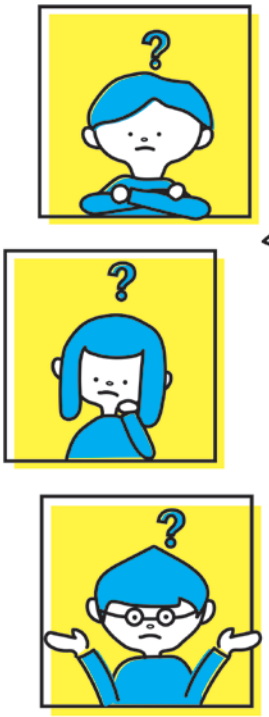
〈準グランプリ〉アートクレイ倶楽部会長賞

Astari G. Swatantri氏（フィンランド）
ひらめき　アクセサリー部門「Sweet Moments」

〈準グランプリ〉生涯学習開発財団奨励賞

狩野良行氏（神奈川県）
ひらめき　リング部門「玄武」

なぜ私たちは じゃ、どうすればいいの？ と思ってしまうのか。



2021年11月20日　オンライン開催

講師：佐伯 胖（ゆたか）

信濃教育会教育研究所所長／東京大学・青山学院大学名誉教授

慶應義塾大学工学管理工学科卒業、同大学院管理工学専攻修士課程修了後、米国ワシントン大学大学院心理学専攻に入学、1970年同博士課程修了（Ph.D.）1971年東京理科大学理工学部助教授、1981年東京大学教育学部助教授、同教授を経て2000年同名誉教授に。同年より青山学院大学文学部教育学科教授、2008年同社会情報学部教授、2013年同名誉教授。2012年より（公社）信濃教育会教育研究所所長、2015年より田園調布学園大学大学院人間学研究科子ども人間学専攻教授、2021年退職。主著：『幼児教育へのいざない』2001年、『共感―育ち合う保育のなかで』（編著）2007年、『ワークショップと学び』（編著）［全3巻］2012年、『子どもを「人間としてみる」ということ』（編著）2013年、『「子どもがケアする世界」をケアする』（編著）2017年、『ビデオによるリフレクション入門』（編著）2018年）など。

●共催：青山学院大学 社会情報学部／青山学院大学 学習コミュニティデザイン研究所
●協力：青山学院大学 社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム事務局

講師の佐伯 胖氏（Zoom画面から）

まるで謎掛けのようなテーマに「どういうこと？」と思われた方もいらっしゃることだろう。生涯学習の講座や資格試験を思い浮かべて、もし答を教われない、あるいは答がないとしたら。たしかに困惑して、「じゃあ私、どうすればいいんですか？」と思わず聞いてしまいそうである。答がない事象への向き合い方やその創造性を、佐伯先生と一緒に考えてみた。

■ まじめ主義の日本の先生

日本人は、人からありがたい話を聞いたあと、最後にHow toがないと落ち着かない人が多い。たしかに答えをズバリ言ってくれるとスッキリする。でも、「それでいいのか？」「おかしいんじゃないのか？」と疑問を持っていいのではないか。

日本は明治維新以来、衣服、食べ物、マナー、立ち振る舞い……西洋文化の輸入に必死になった。しかも、そのスイッチの切替えがみごとだった。What/whyの話は偉い人が探求すればいい、凡人はHow toがわかればいい、そういう教育を政府がやってきたからだ。

学習指導要領には「これからはどうすべきか」ということが書かれているが、先生が教科書とセットで使っている「指導書」には、板書のしかたまで克明に書かれているのだ。それがないと、先生が「どうすればいいの？」となる。

先生には、「あなたはちゃんとやっていますか？」とつねに問われている恐怖感があるという。PDCAのサイクルを躾けられていて、誰かに評価を受けていることをいつも意識する。答がないと困るので、じゃあどうすればいいのと思ってしまう。

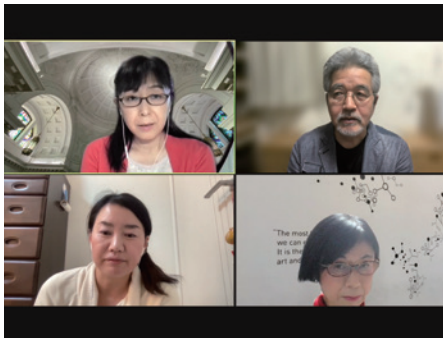
日本の先生は、やるべきことをきちんとやるまじめな先生がほとんどで、「どうすればいいの？」の背後にあるのは、その「まじめ」主義なのだ。それに疑問を持った先生がやっと最近出てきているという。

■ 遊び心とまじめさは並存できる

哲学者であり偉大な教育者の一人、ジョン・デューイは1909年に言っている。「遊び心とまじめさは同時に並存するし、それこそが「心の持ちよう」としての理想である」。「遊び心」だけに走ると「ふざけ」になるが、「まじめ」だけに走ると「苦役」でしかなくなる。

わかりやすい例。因数分解を学ぶことにどういう意味があるかわからないと苦役になる。将棋の藤井聡太さんは、小さい頃から将棋に夢中になり、プロを目指して厳しい対局をしたり、膨大な棋譜を研究したりしてきているが、そこにあるのは苦役ではなく遊び心だ。

まじめ心の代表が仕事だが、その目的の善さを理解し、得られる可能性があると仕事は苦役にならない。達成される目的の善



ブレイクアウトルームに分かれてのグループ議論も行われた。

さや楽しさが予感できるということが大切だ。たとえば、葉っぱをお皿に見立ててままごとをしていて、よりお皿っぽい葉っぱを探し始める。さらには粘土でお皿をつくり始める。だんだんワークっぽくなるのだが、苦役にはならない。ままごとがもっと「おもしろくなる」予感があるからだ。「ワークはわくわく」がいいのだ。

■ まじめな遊びがノーベル賞に

ワッサーマン・Sは、子供時代の「遊び心」と「仕事心」が渾然一体となった「まじめな遊び（Serious Play）」が、ノーベル賞につながるという考察をしている。ノーベル賞クラスの何百人もの子供時代を調べたのだ。ライト兄弟は裏庭に実験室のような場所をつくって、そこにいろんなものを持ち込んで遊んで、学校には行かなくなった。その延長上でとうとう飛行機をつくってしまった。アインシュタインも学校嫌いの子供だったのは有名で、自分の興味のあることだけに没頭していた。そして多くの場合、子供が好きなことだけやるのを、親が許す家庭環境があったとされている。

ワッサーマンは、授業の中でやりたい放題ができる空間を作るべきと言い、「まじめな遊び5原則」を挙げている。

①遊びが生成的であること（正解以外の新たな問を次々と生成していく）
②未知のリスクを伴うこと（を受容する）
③失敗は存在しない（想定外は新たなチャレンジ）
④自律的であること（何をするか、どうするかは自分で決める）
⑤体を動かす（考えるより先にまずやってみる）

■ 子供を夢中にさせる「レミダ」

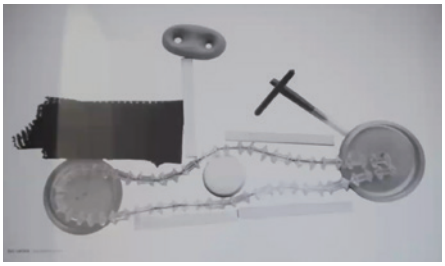
佐伯先生も訪れた、世界が注目するイタリアの「レミダ」。レッジョ・エミリアで、市と非営利団体が共同で運営するリサイクル・クリエイティブセンターだ。市内の企業で不要になった、紙、金属、プラスチック、布などが倉庫に分類されていて、子供たちがそれらを教室に持ち込み、夢中でものをつくる。できた作品は、街角を彩るアートとして展示されたりもしている。

レミダの入り口には次のような言葉が掲示してある。「モノの言葉を聞きましょう。モノには独自の言葉がある。それらは物語を語りだす。新しい関係を作り出す。新しい好奇の目で見るカギを提供します」。

実は日本の小学校の図画工作科にも「造形遊び」という領域がある。文部科学省の指導要領に「遊び」という言葉が入っているのを見て、佐伯先生も驚いたという。最初に入ったのは1977年で、「造形的な遊び」だったのが、1989年の改訂以降は「造形遊び」と定められている。

イタリアの「レミダ」の前で

不用品から創作する子供たち


街のアートにもなっている、子供が創作した自転車の一つ

導入に中心的な働きをした、当時番町小学校教諭だった西野範夫さんは、「当初『造形的な遊び』としたのは、作品づくりではなく、子どもたちが自由に造形そのものを遊ぶことで、その子らしい造形表現のありようを回復する必要性を考えた」という。西野さんはさらに、算数や社会など他の教科でも同様に、子供が自分で面白いものを見つけて向き合っていく必要性を訴えている。「レミダ」のような授業を夢見て「造形的な遊び」を導入したのだ。どう授業してどう評価していいかわからないとの声もあるが、なんとか残っている。

■ 決着がつかない「天然知能」

少し難しい話だが、郡司ペギオ幸夫さんの『天然知能』という書籍がある。「人工知能」は、過去の膨大なデータ、つまり自己の経験から推論される新しい知。「自然知能」は、自然の法則と論理的、科学的に解明されうる客観的事実を得る知性。人工知能と自然知能に共通するのは、正解が存在すると想定して探求されることだ。

「天然知能」は決着がつかない、肯定と否定が両立する知だ。たとえばデジャブ、東日本大震災の被害者（被害者なのに身近な人を救えなかった加害者意識が消えない）、合否は決まっているのに（どうか合格していますようにと）祈る行為。「私たち」という（自他の共通項のみを意識した）認識。金子みすゞの詩「雀のかあさん」の、わかるような、わからないような、わかってしまいたくないような、かあさん雀の気持ちへの想いがずっとあとを引く。

■ DNDを沸き起こさせよう

人は分身としての「わたし（コビト）」にあらゆる世界で体験させ、その体験を統合して世界を納得するという。かの江川卓投手は初対戦の打者にはけっこう打たれるが、二度目は必ず抑えたと言われている。聞くと、帰ってから打たれたバッターの真似をして、相手から見た自分のピッチングを振り返るというのだ。

「じゃあ、どうすればいいの？」からの脱却は可能なのか？

対象に対して期待と不安の両方があるときは「どうなんだろう（DND）」という問いを持ち、対象の内側にマイナス距離の接触を試みる。「なってみる」「やってみる」「感じてみる」。決着を急がずなるべく後回しにする。仕事の場合は一応の決着はつけるが、DNDはやめない。

佐伯先生は、「決着がつかないことをDNDで探求することは、遊び心の真髄。DNDが皆さんの中に沸き起こることを期待します」と締めた。

鬼の学び ⑮

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚 忠 のアンテナ エッセイ

激動する世界を読み解くカギ

鬼塚　今回のゲストは元外交官で、現在、芸術文化観光専門職大学の教授をしている山中俊之氏です。この2月に、ダイヤモンド社より『世界の民族超入門』を上梓されましたね。売れ行きも好調なようですが、これは前作、同じ版元から出された『世界5大宗教入門』の続編という感じですか？

日本人が苦手な宗教と民族が世界を動かす

山中　お陰様で、この書籍はネット書店のアマゾンで「文化人類学」という大きな分類別でも1位になりました。今回の『世界の民族超入門』と、前回の『世界5大宗教入門』の関係は、日本人が世界で仕事をし、活躍する場合に、重要となるテーマのうち一つが宗教で、もう一つが人種を含めた民族という関係にあります。

私たちの行動は仏教の慣習などが色濃く残り、本当は宗教的な特徴を持つのが日本人の特徴です。しかし、日常的に宗教を感じる機会は、法事などを除き、多くはありません。一方で、世界の中で、多数を占めるキリスト教やイスラム教などの一神教についての理解が不足しています。

日本人の中には、何か怪しい団体のことを、「宗教のような団体」と表現する人がいますが、これは日本的感覚です。世界では、宗教は人間の死生観を司る、すなわち死後に天国に行くのか、地獄に行くのかを司る、もっとも厳かなものです。

中には、「宗教的でない」「無宗教である」という人もいますが、宗教自体を怪しいものと捉えることはありません。これが世界の常識です。

一方、日本の中の民族は、アイヌ人や在日コリアンや外国人ビジネスパーソンなど、多くの民族の人が共存している社会であることは間違いないのですが、圧倒的に日本人による日本語の社会であるために、民族について見えにくくなっています。

また、日本には、米国ほどの人種差別が社会問題化した経験がありません。そのため、米国のBlack Lives Matter（黒人の命も重要だ）運動の高まりなどのニュースに接しても今一つピンときません。

複数の政治家が、ユダヤ人問題などで問題発言をしているのも、ユダヤ民族が背負ってきた民族の苦難の歴史を理解できていないことに起因します。

しかし、世界では、宗教も民族も一定の常識として知っておく必要があります。そのためにこの2冊を執筆させていただきました。

ウクライナとロシアはなぜ対立？

鬼塚　なるほど。この書籍は元外交官だからこんなに詳細に書けたわけですか？

『「世界の民族」超入門』
（ダイヤモンド社）

『世界5大宗教入門』
（ダイヤモンド社）

山中俊之
(やまなか・としゆき)　著述家。芸術文化観光専門職大学教授。神戸情報大学院大学教授。株式会社グローバルダイナミクス取締役。1968年兵庫県西宮市生まれ。東京大学法学部卒業後、1990年外務省入省。対中東外交、地球環境問題、首相通訳(アラビア語)、国連総会などを経験し、2000年に外務省を退職。2009年、稲盛和夫氏よりイナモリフェローに選出され、グローバルリーダーシップの研鑽を積む。2010年、グローバルダイナミクスを設立。激変する国際情勢を読み解きながらリーダーシップを発揮できる経営者・リーダーの育成に従事。2011年、大阪市特別顧問として橋下徹市長の改革を支援。2022年現在、世界96カ国を訪問し、先端企業から貧民街、農村、博物館・美術館を徹底視察。テレビ朝日系「ビートたけしのTVタックル」他出演。

山中　私は、1990年に外務省に入省して、中東の部署に配属されました。丁度イラクのクウェイト侵攻があった年で、連日中東の情報収集のために深夜までロイターなどの外電をチェックしたり、世界各国の大使館からの情報を分析したりしていました。連日激務で睡眠不足でふらふらになるほどでした。

その後、エジプトに赴任して、エジプト人家庭に2年間下宿してアラブ文化・イスラム文化を実地で体験しました。その後は英国ケンブリッジ大学で開発学を学びました。全世界から集まった留学生と文学から宇宙工学、獣医学など異分野について議論しました。自分の無知、教養のなさを痛感しました。

その後、サウジアラビアで大使館勤務を経て東京に戻ったあとに外務省を退職。民間コンサルタント、独立起業といったビジネスでの経歴を経て現在に至ります。

鬼塚　世界の民族を知るというのは、とても面白いとは思うのですが、日本人がこれを読むというのは、教養と割り切って読むのが良いですか？それとも何かいま、自分たちの住む世界と関連づけて読むのが良いですか？

山中　是非とも自分たちの住む世界と関連付けて読んでいただきたい。例えば、2022年2月現在大きな軍事的緊張になっているウクライナ問題です。

ウクライナというと、「旧ソ連の国でソ連崩壊後独立した」という知識は誰でも持っていると思います。しかし、歴史をさらにさかのぼれば、ウクライナの首都キエフは、現在のロシア正教のおおもとでもあった場所であり、9世紀末から13世紀にかけてロシア帝国の前に存在したキエフ公国は、ロシアと民族的に近いいわば兄貴分です。

「世界の民族超入門」では、モスクワが東京なら、キエフは京都、奈良のようなものと比喩的に述べていますが、それくらい両民族の関係は近接しているのです。

それだけ近いがゆえに、複雑な歴史を抱えて、近親憎悪的な面もあります。同時に、言葉や文化、宗教が近いために理解しやすい面もあるのです。

歴史や文化、宗教のバックグラウンドがなく、単に新聞やテレビ報道での現状の解説を、表面的に読むだけでは民族は理解できず、民族が理解できないと世界情勢も理解できません。

知識とそれに基づく見識が重要

鬼塚　山中さんのように、知的探求を続けるというのは素晴らしいことです。山中さんはどう、その見識を広めていますか？

山中　別に見識が広いわけではありません（苦笑）。

しかし、ケンブリッジ大学での留学経験から、幅広い知識やその知識に基づく見識が重要であるとは、心の底から思っています。

22歳で大学卒業後、博士（国際公共政策）、修士（仏教、経営、開発学）3つ、学士（芸術）1つの学位を取得していますが、いずれもケンブリッジ大学時代に認識した自らの無知への反省です。

現在はコロナで行けませんが、これまで96か国を訪問し、農村・スラムから先端企業まで徹底取材をしています。仕事の相手先や観光地に限らず、時間があればタクシーに乗って、貧民街や農村も多数訪問して取材するようにしています。

年間読書700冊、映画・海外ドラマ200本、博物館・美術館100回、演劇30回などを目標にし、知識・見識を広げるように努めています。

また、毎朝まず読むのは『New York Times』です。同紙は世界で最も影響力のあるメディアの一つです。日本のメディアと内容が全くといっていいほど違います。

現在は、コウノトリで有名な兵庫県豊岡市を拠点に「新しい地球文明のあり方」を模索しています。豊岡市は、人口減少が続く過疎地ですが、山陰ジオパークなど自然が豊かで、一旦は絶滅した野生のコウノトリが多数生息するようになるなど環境も抜群です。

産業革命以来の歴史は都市を中心に発展してきましたが、その結果人間が自然を軽視して傲慢になった面があるのではないでしょうか。気候変動問題から、環境ホルモン、コロナ感染症拡大など多くの問題は人間の傲慢さに遠因があるように思えます。

鬼塚　生涯学習情報誌の読者へ何かメッセージを！

山中　世界は激動しています。知的探求心を忘れないことで激動する世界を読み解いて、自らの仕事や生活を是非とも有意義なものにしていきましょう！

● 著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか　ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、２年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年６月まで海外書籍の版権エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書:『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社) 2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記 念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(幻冬舎)2012年映画化など多数。